

「京都市景観政策検討委員会第1回施策検討専門部会」 議事録

開催日時	令和7年11月26日(水) 午後6時～8時30分
開催場所	京都市役所 分庁舎4階 第1会議室 ※委員はオンライン参加
出席者 (委員は、五十音順)	<p>部会長 門内 輝行 (大阪芸術大学教授、京都大学名誉教授)</p> <p>委員 嘉名 光市 (大阪公立大学大学院教授)</p> <p>〃 清水 重敦 (京都工芸繊維大学教授)</p> <p>〃 平尾 和洋 (立命館大学教授、平尾アトリエ主宰) ※遅参</p> <p>〃 宮城 俊作 (Harvard University Graduate School of Design 客員教授、設計組織 PLACEMEDIA ファウンディングフェロー、宗教法人平等院 代表役員)</p> <p>〃 山口 敬太 (京都大学大学院准教授)</p> <p>臨時招集委員 谷口 みゆき (京都橘大学経済学部経済学科准教授) ※遅参</p>
欠席者	なし
充足率	委員7名中5名出席(開始時刻時点。臨時招集委員は除く。)
事務局	<p>都市計画局長 箕 哲也</p> <p>都市計画局 建築技術・景観担当局長 文山 達昭</p> <p>都市計画局 都市景観部長 岡田 圭司</p> <p>都市計画局 都市景観部 景観政策課長 寺谷 淳</p> <p>都市計画局 都市景観部 景観政策課歴史的景観保全担当課長 伊藤 真嗣</p> <p>都市計画局 都市景観部 景観政策課都市デザイン担当課長 関岡 孝繕</p> <p>都市計画局 都市景観部 景観政策課企画係長 高橋 諒</p> <p>都市計画局 都市景観部 景観政策課歴史的景観保全担当係長 横川 祥一</p> <p>都市計画局 都市景観部 景観政策課都市デザイン第二係長 鈴木 美和子</p> <p>都市計画局 都市景観部 風致保全課長 橋本 操</p> <p>都市計画局 都市景観部 広告景観づくり推進課審査担当課長 竹林 哲</p>
会議の公開・非公開	公開 (傍聴者5名、報道関係者2社)
議題	都市の活力を生み出す景観形成について
資料	<p>資料1 説明資料</p> <p>資料2 京都市を取り巻く社会経済情勢等</p> <p>資料3 市内個別エリアの都市活力と景観形成</p> <p>資料4 施策展開状況(基本的な考え方(4))</p>

議事の経過	
発言者	発言内容
事務局	<p>定刻になりましたので、ただいまから令和7年度京都市景観政策検討委員会第1回施策検討専門部会を始めさせていただきます。本日は大変お忙しい中、本部会に御出席を賜りまして誠にありがとうございます。</p> <p>(資料の確認)</p> <p>続きまして、会議の公開・非公開についてでございますが、本日の部会は、個人のプライバシー情報や、公開することで事業者の競争上または事業活動上の地位、その他正当な利益を侵害するおそれがある情報は含まれておりませんので、京都市市民参加推進条例に基づき公開とさせていただきます。皆様、御異議等ございませんでしょうか。</p> <p>(異議なし)</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>それでは、傍聴者、報道関係者の方に入室していただきます。どうぞ御入室ください。</p> <p>御審議に入っていただきます前に、本部会の成立について御報告をさせていただきます。本日は7名の部会員のうち、現在5名の皆様に御出席をいただいております。本日は吉江委員が御欠席、平尾委員が遅れて御参加いただくと御連絡を頂戴しております。従いまして、京都市景観政策検討委員会規則第5条第3項に規定する定足数の過半数を満たしておりますので、本日の部会が有効に成立していることを改めて御報告をさせていただきます。</p> <p>なお、本日は臨時招集委員といたしまして、谷口委員、河島委員に御案内しておりました。河島委員は本日御欠席ということで、谷口委員は後程御出席いただく予定です。どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>続きまして、本日の議題について確認をさせていただきます。本日の議題は次第の上段に示しておりますとおり、「都市の活力を生み出す景観形成について」になります。また、本日は初回の部会になりますので、会議の終盤に部会長から部会長の職務代理者の指名をしていただきたく思っております。</p> <p>それでは、ここからの議事の進行につきましては、門内部会長にお願いしたいと存じます。門内部会長、どうぞよろしく願いいたします。</p>
門内部会長	<p>はい。それでは、ここから本日の議事を進めさせていただきます。まずは事務局から資料の説明をお願いいたします。</p>
事務局	<p>(資料説明)</p>
門内部会長	<p>ざっと説明していただきましたが、議論していただきたいこととして、12ページに3点整理されています。このうち、「都市の活力をどのように捉えるのか」、及び「景観と都市の活力との関係性はどのようにあるべきか」という2つの論点について、まず御意見を頂いて、しばらく議論した後に、3つ目の論点に入っていきたいと考えています。</p> <p>最終的に、このような議論をして、どういう施策に結びつけていくのかといった施策のデザインの方向性も、少し頭に入れながら議論した方が良いかと思っております。例えば、あるエリアをうまく作ることによって、今まで点的・線的に行っていた活動を面として展開していったり、魅力的な景観を作れば、そこに多様な人々が集積してクリエイティブになっていったり、というふうに色々なシナリオが考えられると思います。前回も活力について</p>

	<p>色々な議論があったと思いますが、本日はもう少し踏み込んでそれぞれの方の意見を伺いたいと思います。3つの論点に分かれています。この「活力」ということについて、誤解も招きやすい言葉でもありますので、その辺りの議論を自由にいただければと思っております。いかがでしょうか。</p>
谷口委員	<p>質問させていただいてもよろしいでしょうか。私は経済の分野が専門ですので、景観とウェルビーイングと言われたときに、少しピンとこないのですが、健康などのウェルビーイングと景観を結びつけるというのは、具体的にどういふことか例を挙げていただくことはできますでしょうか。</p>
門内部会長	<p>事務局から説明していただけますか。</p>
事務局	<p>景観の考え方については、建物のデザインといったことだけではなく、そこで生まれている生業であるとか、五感で感じる景観という表現をしますが、そこでどういった活動が生み出されて、どういった主体がそこにいるのかということを含めて、全体を見ての景観という表現をしております。</p> <p>最近のウェルビーイングの話でいきますと、どういふふうでそこで健康的に活動するのか、人々が暮らせるのかということがよく議論されますが、ただ美しい景観を作ることだけではなく、そこでより健康的な活動が行われるような風景を作っていく、というように話を展開していきたいと思っております。</p>
門内部会長	<p>東京の丸の内での例で、森を作って昼にラジオ体操をしたりするといった例があります。また、私は日経ニューオフィス賞の近畿ブロック審査委員長を務めており、色々なワークプレイスを見させていただいていますが、ワークプレイスの中でクリエイティビティを上げるために、働いている人のウェルビーイングが最も大きなテーマになっています。まず活力を生み出す人間の健康状態を良くすることが、メインのトピックになってきています。</p> <p>あらゆる活動が人間を媒介として生まれてくるので、ウェルビーイングに貢献する景観を作っていくということが、間接的ではあっても、経済の活性化になるということです。かつてアメリカでIBMの会長が『イノベート・アメリカ』という通称パルミサーノ・レポートを出しましたよね。そのときに注目されたのが睡眠工学です。「快眠を取る」ということが活力を生み出すことにつながるからです。そういう意味で、ウェルビーイングを媒介として、人間の生命活動を活性化していくことが、経済の活性化につながるのではないかと思います。いかがでしょうか。</p>
谷口委員	<p>何となくわかった気がします。心が安らぐようなまちに景観を持つていくことなのですね。ただ、政策を実行したときに、ウェルビーイングが上がったのかという効果をどう測定するのかと考えた場合には、少し難しいなとは思いました。しかし、目指す方向というのは、言葉で説明しようと思うと難しいですが、安らぎの空間であったり、そういう方向なのだろうと理解できました。ありがとうございます。</p>
門内部会長	<p>景観が美しくなり、環境が良くなったりすると、「住みたい」「働きたい」という人々が集まります。色々な人材が集まることが、クリエイティビティの根幹になると思います。ありがとうございます。</p> <p>他にいかがでしょうか。</p>
山口委員	<p>まず1点目の都市の活力についてですが、先程門内部会長がおっしゃったように、「どう捉えるのか」という捉え方の話があると思います。これを都市の魅力とか、例えば活気とか、生き生きとした魅力として活力を捉えるの</p>

	<p>か、それとも経済的活力を捉えるのかで、目的が大きく変わってくると思っています。</p> <p>私個人の意見としては、経済的活力、例えば来訪者が増加するとか居住者が増えるとか、そういったものはどちらかというと目的ではなく結果であり、下流側に来るべきではないかと考えています。逆に目的とする活力というのは、魅力と言いますか、活気、先程の話ですと人の居場所があったり交流する様子が見えるとか、さらには御説明の中にあつた文化が見える化するとか、そういう長い時間軸上での活気のようなものを作るということが目的になるにしても、経済的活力を最初から目的にするのは、少し難しいかもしれないと思いました。</p> <p>次に、それをどのように作るのかという政策的なところで言うと、門内部長がおっしゃったようにエリアで考えるというのも一つだと思いますし、一方ではストリートスケープで考えていく、路地型でも良いのですが、小さな沿道である種の特例や特区というものを考えていくのも一つの方法かなと思っています。</p> <p>その中で、魅力に着目した景観基準や活力創造の定性基準といったように、低層部の在り方に関するガイドライン、もしくは基準のようなものがあるのも良いのではないかと思います。具体的に言うと、例えば屋根や軒なしのオープン型をどこまで認めるのかであったり、屋根下・軒下のセミオープンの場合はどうするのか、また、ガラス面としたときに内側は普通は建築物の内部に相当しますが、ある種のファサードとして見て、例えば景観のガイドラインの中に取り入れていくということも考えられるかもしれません。その辺りの沿道から見えるところの空間の在り方や、工作物、占用物、照明の在り方などについて、ガイドラインのようなものを作っていくのも一つの方法ではないかと感じました。</p>
門内部長	<p>ありがとうございます。京都市では、低層部で優れたストリートデザインを展開している建物については、建物の高さを緩和する「空間創出型高度地区における景観形成に関する認定制度」を創設しています。屋外空間だけでなく、半屋外空間や屋内空間まで含めて、パブリックスペースとして活用することは、優れた都市景観の形成につながると思います。</p> <p>金野委員は『ロジgia』という書籍を書かれています。コロナ以降は半屋外空間にも注目が集まっていますよね。</p> <p>他にいかがでしょうか。</p>
嘉名委員	<p>論点が3つ書かれており、まだそれを順番に理路整然とお話しできないのですが、関係するようなことを少しお話しさせていただきます。</p> <p>一つは、都市の景観、活力をどう捉えるかということですが、これはまさに金田章裕先生などがおっしゃっている文化的景観そのもので、営みが現れているということですから、都市活動と景観というのは不可分であるということだと思います。</p> <p>つまり、現れとして出てくる景観が、見ている人に対して、対話したり、問いかけをしたり、それから人に寄り添ったりという関係性があるということは明らかで、それをしっかり良いものにしていけば、もちろん街と人々との対話が成立して、それが魅力になって、そういう関係性がより作れるということだと思います。それを可視化するというのは、一つの方法としてはあるのではないかと思います。</p>

以前、先斗町で地元の協議会が軒先花展というものをやっていたらしいです。先斗町は実は空間的には開いていないのですが、軒先の花があると、その先にいるお店の中の人とコミュニケーションできるといったように、先斗町なりのコミュニケーションというのをやっていたら、非常に面白いなと思いました。そういう発想やアイデアで、何かコンタクトを取っていくのは一つの方法かと思っています。

また、御紹介いただいた事例で、活力という言い方で説明されていたのですが、私なりの理解だと、やはり地域の課題を抱えていたり、むしろ活力が低下しているような状態のところをどうしてこうかというように非常に危機感を持って取り組んでいらっしゃる事例が多かったような印象があります。例えば八戸はデパートが潰れた場所なので、要は経済的に活動が成り立たなくなった空地进行をどうにかして、居心地の良い景観をつくるか居心地の良い場所を作るといった問題意識でやっていたらいいんじゃないかという感じですね。

下北沢も鉄道を地下化することにより余白地のようなところが出てきてしまい、そこを魅力的にしないと人が来てくれないだろうという危機感の中でやっているところがあって、もともと何か活力があって、表層的な操作をすれば人が来てくれるというような意味合いでもないような気はしています。

今回の論点や問題意識は、大変結構だと思いますし、文化的景観に関わる話だと思うので非常に重要だとは思いますが、一方で疑問もあり、これらを行政がこと細かに決めるべき性質のものかと言われると、そうではないのだろうと思います。つまり、自生しているようなものでもありますし、それを規定してしまうと息苦しさが出てしまう気もしています。

一方で、本来は地域が主体で考えるのかということですが、地域で考えられる、主体的に動けるところがどれほどあるかという現実的な問題があります。つまり、行政はそれらを育てていく、あるいはサポートをしていき、地域がいずれ自立して、景観をマネジメントしていけるような方向性を見出すのは一つの方法としてあるかも知れないと思って聞いていました。もう少し具体的な施策になってくると、例えば仮設物や道路に置くものなど、今まで景観の指導の対象になっていないものなどが、事例を見ていると対象としてあるかもしれないと思います。それには道路空間も含まれるでしょうし、例えば窓面の広告のようなものも含まれると思います。

また、私は景観の届出手順を詳しく、かつ十分に理解していないかもしれませんが、例えばリノベーションのようなもので、今まであまり建築確認申請が伴わないようなもので、表層的な部分を変えるようなものは、本来的にはもう少し扱っても良いものがあるのではないかと考えています。例えば、私の研究室の学生と卒業論文・卒業設計で取り組んでいるのが中津というところで、長屋などが多くあるところなのですが、リノベーションやコンバージョンを行っていて、我々の間では開く建築とか、アフォーダンスな建築といった言い方をしています。閉じられたものをもっと町と関係付けるという操作をして、お店を作るといった試みが結構実施されています。そういうものをやるなら、例えばガイドラインやローカルルールのようなものを作るという方法はあるかもしれないなと思って聞いていましたが、まだ自分の中でも正解がはっきり見えていないという感じです。

門内部長	<p>ありがとうございました。中津の商店街は昨年私の研究室でも卒業制作に取り組みました。建築家の方々も色々とやっておられますよね。“あふれ出し”などの興味深い現象が認められますが、それらをパターンランゲージとして抽出し、エリアに集積することも考えられます。</p> <p>また、先斗町の場合は「地域景観づくり協議会」のメンバーを中心に頑張っておられて、まちづくりの活動を活発に展開されていますよね。そういうプレイスメイキングの活動が含まれているのだらうと思います。</p> <p>他にいかがでしょうか。</p>
谷口委員	<p>私は建築の専門外なのですが、この論点を見ていて気になったのは、少し話が飛ぶのですが、現在、京都市の観光総合調査の令和5年度の個票データを頂き、日本人観光客のデータと外国人観光客のデータの両方を分析しております。外国人からの声を客観的に統計資料から見ると、京都市の問題点として、観光するときに日本語の表記や中国語の表記はあるけれども、それ以外の言語の表記がないのもっと増やしてほしいとか、ゴミを捨てようと思ったときにゴミ箱がなくて困るといったことが書いてありました。</p> <p>経済的価値にとどまらないで景観を考えたときに、外国人の外貨が欲しいからといって、外国語の看板をそこら中に設置するというのは、今後何らかの規制をして控えるといった方向になっていくのでしょうか。</p> <p>すでにホテルなどは、外国人受けするような、外国人がイメージする日本の宿の景観・外観を持ったものがどんどん建っているかと思います。それはやはり、私たち日本人から見たら少し違うのではないかといいところがあり、メディアで一時期ニュースになっていたかと思います。そういったものを控えて、本来日本人がイメージするような景観をある程度保っていく方向性を目指すのでしょうか。</p> <p>外貨が欲しいからといって、その景観を壊してまで外国語の看板などを増やすということはしていかない、ということなのかなと、今感じました。</p>
門内部長	<p>ヨーロッパなど色々なところに行くと、町の表記などの公共広告にも非常におしゃれなものがありますよね。私は美観風致審議会の広告物専門小委員会の委員もしているのですが、お金儲けなど表層的なことだけでなく、広告物も文化として育てていく必要があると考えています。ゴミ箱については、最近京都新聞に嵐山に設置された「スマートゴミ箱」の事例が掲載されましたが、散乱状態のゴミが劇的に改善されたそうです。</p>
谷口委員	<p>ゴミ箱を設置してそういう効果があったというのは知らなかったのですが、ゴミ箱が足りないという声はたくさんあります。物によるのかもしれませんが、設置すると景観が壊れるような気がします。</p>
門内部長	<p>ツーリズムの問題も絡んでいると思います。表層的に見て回るツーリズムもありますが、しばらく滞在して日本文化を身につけていきたいという短期滞在型のツーリズムを楽しむ人も増えてきている傾向があります。そういうツーリズムの在り方と景観との関係まで踏み込んで考えてみる必要があるかもしれません。オーバーツーリズムにははいけません。</p>
清水委員	<p>私はこの活力問題と真っ向から反対してしまうかもしれませんが、京都の景観はコンテキストにこだわってほしいと思います。</p> <p>今回の資料では、残念ながらコンテキストに対する読みが浅く、驚いてしまいました。例えば岡崎だと、すでに文化的景観になっていて、非常に分厚い報告書も出しているのに、何も語っていないですよね。</p>

	<p>おそらくコンテキストを意識しすぎると制約になると思われているのではないかと思うのですが、逆だと思います。</p> <p>私は先週末に韓国に行っていたのですが、すごい勢いで開発しているのに歴史的なものもきちんと守っていたり、リノベーションもものすごく進んでいるのですが、エリアごとに性格があります。そのエリアごとの性格というのは新しく作っていくものなのかもしれませんが、京都はどんな場所でもコンテキストがあるので、そのコンテキストの中で新しいものというものを刷新していくと言いますか、そういう考え方が本当は必要だろうと思います。</p> <p>「それは足かせだ」と思うのであれば、「それって東京を目指すのですか」といった話になると思います。京都らしい景観というのも、この議論の中に常に置いておく必要があって、京都らしい活力を求めるとするのは、結局コンテキストが先にあるのではないかと、やはり常に思います。</p>
門内部長	<p>今、清水委員がおっしゃったことについてですが、私は京都の市街地の修徳学区で10年くらい活動をしておりまして、まちづくり委員会に色々な開発の話が来るときに、各地域のコンテキストブックのようなものを作って置き、何を各地域の魅力とみなすかを説明できるようにしておく必要がある。</p> <p>「うちはこうだから、こういうところを大事にしてくれ」といったことを言うようにしないといけない、という話をずいぶんしていました。開発の話が来てから言うのではもう遅い。エリアごとにコンテキストブックがあると、話が来たときに要望を出せるわけですね。ビジョンの前に、そういうものをちゃんと作る必要があるのではないかと、と言っていたのですが、まさにそのとおりですよ。</p>
清水委員	<p>おっしゃるとおりだと思います。歴史家に任せるとそのコンテキストブックが足かせになる、と言われる可能性がありますが、未来を作るためのコンテキストブックというものは絶対にあると思います。</p>
門内部長	<p>以前、鷺田清一さん、門川前市長、私の3人で京都の都市景観について特別鼎談をしたことがあるのですが、そのときに鷺田さんがおっしゃっていたのは、「京都は小さな町の集合体だ」と考えると良いというお話をされました。良い都市というのは、何か核となるコンセプトのようなもの、これが良いのだというものを持っている、ということです。例えばパリだと「洗練されている」といった鍵になるコンセプトを持っていて、そういうものを大切にしていくことが重要だということです。小さな町の集合体というのは面白いアイデアだと私も以前から思っていました。</p> <p>ヒューマンスケールのエリアごとにそのような鍵になるものをちゃんと作っていく。住んでいる人も関係者も対話が可能な範囲で考える必要があると考えていますが、そういう戦略はあるのではないかと考えています。以前皆様に配布させていただいた、私が『建築ジャーナル』誌に執筆した記事の最後にも、その話を入れさせていただきました。大切な御指摘をありがとうございます。</p> <p>宮城委員、いかがでしょうか。</p>
宮城委員	<p>実は、少し驚いたと言いますか、失礼な言い方になるかもしれませんが、「まだこんなことをしているのか」という印象です。</p> <p>どういうことかということ、まず、説明いただいた5つの地区について、それぞれの地区の「人」の情報が全くありません。基本的に街の活力は、プレイヤーがどの程度アクティブかということです。また、ウェルビーイングの</p>

	<p>対象は何なのかというと「人」です。しかし、そこで実際に活動している人たちについての情報が全くない。おそらくヒアリングなどもあまりしていないのだらうと思いますが、私はこれが結構クリティカルな問題だと感じました。その部分がないとこの議論ができないのではないかと思います。</p> <p>また、嘉名委員が少しおっしゃっていましたが、このような働きかけは、プレイヤーにしてみれば余計なおせっかいなのではないかと思います。本日御紹介いただいた事例は、企業や団体が組織的にコミットしないとできないようなところもありましたが、よく見ると、やはりほとんど個人か小さなグループで活動しているところが、何かしらの成果を出しているように思います。そのように考えると、当事者たちは「余計なことはしないでほしい」という思いもあるはずです。もちろん、まちづくりの過程で「これはやってはいけない」ということは当然あるでしょうが、行政の関与はそこまでしておいて、それ以外のところは基本的にフリーハンドで良いのではないかと私は思っています。この地区はこういうキャラクターだからこのような方向に誘導していくということ、少なくとも行政がやるべきではない。地区のプレイヤーにどんな人がいて、どんな動きがあるから、それをどのようにサポートするかというような体制であれば良いのですが、固定された景観のイメージが先にあって、そちらに向けて誘導していくように、その人たちの活動なり行動なりを手とり足取り、箸の上げ下ろしまで指導あるいは誘導する、そういったことはすべきではないでしょう。</p> <p>一言で申しますと、本日の御説明は景観とどう関わるのかが私にはよく見えません。元来、街の活力と景観の関係は、「鶏と卵」の関係に近いところがあるので、この議論を始めるとデッドエンドに陥るのではないかと印象を初めに持ちました。かなりネガティブなお話になってしまいましたが、そのように思っています。</p> <p>また、少し話が逸れますが、街角のゴミ箱について、私はやはり基本的には置くのはやめたほうが良いと思います。10月の1週目にハーバード大学の学生が来て、12人一緒に1週間を過ごしたのですが、彼らは異口同音に、街にゴミ箱がないことは素晴らしいことだと言っていました。もちろん置きたい人が置くのは良いのですが、誰がそのケアをするのかということまできっちりとした仕組みが必要で、それが無いものは無責任極まりないと思います。</p> <p>サインの問題も同様で、基本的にはデジタルで様々なものが掲出できる時代に、フィジカルなものとしてマルチリンガルにサインを作っていくというのはナンセンスの極みだと私は思っていますので、そこを含めた検討はやるべきでしょう。</p>
門内部長	<p>ケーススタディを選んだ事務局側の意見はいかがでしょうか。その辺りについて調査等しているのでしょうか。</p>
事務局	<p>半分は現地でヒアリングをしているものがあります。他都市調査の事例に挙げているものについては、例えばボーナストラックの件であれば小田急電鉄やその周辺の方にヒアリングをしていますし、八戸の事例についてもエリアの管理主体に調査をしたり、青森やオガールなど、その辺りについては実際に取り組んだ事業者や周りで活動している方の声を聞いた上で活力はどんな状況なのかを把握しました。</p>

	<p>一方で、御指摘の通り、具体的な京都のエリアでどんな取組をしているかというところのプレイヤーの声までは調査が行き届いてない部分があります。ただ、資料を作るにあたって、このエリアのまちづくりに長らく関わってきた職員がおりますので、その者が捉えていたまちの活力をベースに、資料を作っているのが実際のところですよ。ヒアリングが足りていないという御指摘があるかと思いますが、全くしていないわけではございません。</p>
門内部長	<p>宮城委員が指摘されたことの中に、「余計なことをするな」というお話がありました。それはマスタープランの作り方の問題と大きく絡んでいきます。京都全体に大きくマスタープランをかけていくのですが、各エリアでビジョンを出そうとしたときに、日本人が下手なのか分かりませんが、まちづくり活動の中でビジョン作りはあまりうまくいきませんよね。行政のビジョンづくりと自発的なビジョンづくりとをすり合わせていかなければならないと思います。その際に、うまく上下がやり取りできるような形で決めていくということが大切だと思います。先程のまちの集合体の話で言うと、小さなところをどのように全体の集合にスケールアップしていくのかという、マルチスケールで考えていかなければなりません。行政だけで最後のところまではできないと思います。その辺りのマスタープランの作り方についてはいかがでしょうか。</p>
宮城委員	<p>やはり行政は完全にサポート役に回るべきです。特に単位が小さくなればなるほどそうなると思います。色々な意味でプレイヤーを育てるということですね。もちろん、活動の初動の段階で、間違った方向に行かないようにするようなコントロールは必要なのですが、基本的にはそのような活動を積極的にしている人たちは、仮におかしな方向に向かっていく勢いになったとしてもブレーキがかかる人たちがほとんどです。例えば本日は岩手県のおガール紫波がとりあげられていました。御存じだと思いますが、おガールでは岡崎正信さんがキーパーソンですが、彼の活動は、固有の背景とそれに対応する仕組みが明確です。そのようなキーパーソンたちが、グループであったり複数であったりすることはあるけれども、どのような文脈でどのような動き方をしているかをしっかり把握しておかないと、あまり役には立たないでしょう。通り一遍のヒアリングはあまり意味がなく、京都市内であれば、本日御説明いただいた地区に関して、誰が、あるいはどのようなグループが、どのような背景と力関係の中で動いているかをしっかりおさえておかないといけないと思います。対象が人だから全て個別解になるはずですよ。個別解の集積で構わないと思いますし、それを何かしらの枠にはめるということはやらない方がよいのではないかと思います。</p>
門内部長	<p>地域の住民が関わる場所もありますが、一方で、最近はお特区のようなものが出てきて、都市エリアの中に穴が開いてそこへ資本が入ってきているという話もあるので、それをどのようにコントロールしていくかという課題がありますよね。都市計画提案制度も出てきて、大阪駅や梅田周辺でもそういった動きが非常に活発です。その辺りについていかがでしょうか。</p>
嘉名委員	<p>大阪市は景観づくり協定という類似の制度をお持ちで、地域でローカルルールを作りたいというニーズがある場合に、それを作るようなきっかけづくりやサポートをするような制度になっています。具体的にはコンサルタントの派遣などをされています。</p>

	<p>また、ローカルルールが整ってきた場合にそれをどうやって担保するかというと、基本的には民衆の協定ですが、行政がそれにお墨付きを与えるような仕組み、やり方は、現実ではいくつかあるかと思います。ただ、先程門内 部会長がおっしゃったような、いわゆる開発圧、要は今までとがらりと変 えるようなことがスポット的には起こり得るということは現実にあります。そ ういうところは先程からお話に出ているように地域のコンテキストを破壊す るような方向でやってしまうとよろしくないということで、旧来の地域のコ ンテキストをしっかりと読み込ませて、開発と共生させるようなやり方はあ るだろうなと思います。そのときにローカルなルールのようなものが整っ ていれば、このエリアをちゃんと理解せよという話を伝えながら、着地点を見 出す場、協議体と言いますか、テーブルが必要になってくるかもしれないと 思います。</p>
門内 部会長	<p>先程の「人」の話で言うと、色々なところでキーパーソンがおられますの で、やはりアクティビティを展開している人を押さえながらやらなければ、 少なくとも活力の問題を突破できないと思います。</p> <p>最近の制御工学の分野では、手取り足取りで全てコントロールするやり方 は流行っておらず、どちらかというと複雑系になっています。それぞれの個 性を生かして勝手に走らせて、逸脱したときにだけムチを打つ「ハーネシ ング」と呼ばれるコントロールの仕方が注目されています。まちづくりにお いても、全てを規制のコントロールでやるよりも、ハーネシングのやり方を うまく使って、コンテキストの特徴や地域の人々の個性を活かしながらやっ ていく、新しい景観づくりのプロセスを考えていく必要があるかと思 います。</p> <p>本日は三つの論点がありますが、相互に関連し合っていますので、どの論 点からでも発言いただく形で進めましょうか。他にいかがでしょうか。</p>
谷口 委員	<p>京都の歴史的なコンテキストに沿って景観形成していくとか、民間が基本 的にやるべきだという先生方の考え方には私も賛成です。ただ、本日初めに 説明のあったアーティストインレジデンスをやるようなエリア、つまり歴史 的コンテキストがよくなって、犯罪率や景観がよくなるようなエリアに関 しては、行政が主導してそれこそアーティストインレジデンスで何か人工的 なアートをそこに入れ込み、芸術家と市民が交流するような場を作るとい ったことをやらないと、民間事業者はそういった歴史的コンテキストが悪 いところは採算が取れないと判断して入ってこないという事例が日本各地 それから世界中にたくさんあります。そのため治安を良くしたり、景観を今 まで以上にかなり頑張って改善しないといけないというエリアに限っては、 やはり行政が入っていくべきだと私は思います。京都市は芸術家の多いイ メージがありますが、芸術家のジャンル別に見ると、実は他の東京や大阪 といった大きな都市に比べると、音楽家が非常に少ないのです。それは、 京都の家屋が楽器を入れて演奏するのに向かないことが理由として大きい かと思うのですが、京都が他の都市に比べて少し弱い音楽の分野にお いて、アーティストインレジデンスで音楽家に住んでもらい、そこで補 っていくということもこれから考えられるのではないかと考えました。</p>
門内 部会長	<p>京都駅周辺の再生については、現在嘉名委員も有識者会議のメンバーに 入られて活動されていますが、私も京都市立芸術大学を作るときのプロ ポーザルの審査委員長をやっております、出来上がるまではアドバイザー をしており、かつ、現在は客員教授を務めています。芸術大学ができた だけではだ</p>

	<p>めで、それを核として文化の香りがするようなエリアを形成していくためには、それを後押しする行政のサポートが必要です。それがなくなかなか展開しないのではないかと感じます。</p> <p>京都駅の南の方についても、現在チームラボのミュージアムなどもでき、ずいぶん動きができてきているみたいですね。</p>
谷口委員	<p>高架下の京都駅の辺りから東寺に歩く道の途中で、壁面におそらくアーティストが描いた絵があったり、アーティストインレジデンスに似た取組が入ってきているのかなと感じるのですが、アーティストインレジデンスで成功した事例に比べると、まだ十分でないように見えますか、まだやりようがあるのではないかと思います。</p>
門内部長	<p>京都の中で言うと、“あじき路地”というものがあるのを御存知でしょうか。東山の辺りに一階が店舗になっている町家長屋があります。その長屋に若手のアーティストを住まわせています。以前に京都景観賞（建築部門）の優秀賞を差上げたことがあるのですが、そういう面白い取組はいくつかあるようです。</p>
谷口委員	<p>私がよく聞くのは、京都市ではなく与謝野町の方なのですが、芸術家がそこに集まってレジデンスがされていると聞きます。与謝野町の取組に比べると、もっと京都市でもやる余地があるように見えるのですが、既にやっているのですね。</p>
門内部長	<p>委員から色々な意見が出ていますが、資料を準備された事務局側からも考えていることなど発言いただけると良いかと思います。いかがでしょうか。</p>
事務局	<p>承知しました。随時頂いた御意見についてコメントさせていただきます。</p> <p>アーティストインレジデンスについてですが、景観の分野で特別に何かできるかというのは今のところなかなか思いついていないのですが、京都市内の実情としては、やはり不動産価値の高騰による影響が出ていまして、レジデンス機能を持たせるような施設を民間主導で整備していくというのが結構難しいところがあります。採算が取りにくい事業ではあるので、ホテルになってしまったり、流通して不動産が流れていってしまうということが、一般的な事例としてあります。与謝野町のように、人口が減ってきていて地価が安くレジデンスが行われているようなところとは、京都市内の動向が違うというのがベースとしてあります。その中でもレジデンスに対して前向きな気持ちを持っているような、先程門内部長からも御紹介があったあじき路地のようなプレイヤーがいかにいるのかということが結構キーポイントになっていて、先程宮城委員からもお話のあったプレイヤーをいかに育てるのかというのが共通した議題なのではないかと感じております。</p>
門内部長	<p>今回選ばれたエリアを改めてもう一度見ているのですが、例えば桂川エリアについてはイオンモールがありますよね。三条京阪もそうですが、こういう形で大型施設が入ってきてやっていくようなタイプのものや、小さな店が集積したようなところなど、色々なタイプがあるように思います。これは意図的に大型ショッピングセンターなどができているタイプとして選ばれたのでしょうか。桂川エリアに関しては、京都大学の桂キャンパスから宇治の宿舍まで帰るときの最寄り駅で、私もよく利用していました。</p>
事務局	<p>住宅街の活力とはどういう考え方があるかという議論をした上で、出てきたエリアの一つが紫竹・紫野で、もう一つがそのカウンターパート的な位置付けの桂川というイメージです。桂川エリアではイオンモールができて、阪</p>

	<p>急電車の線路が高架化し、その下で色々なコミュニティスペースがある一方で、非常に大規模なマンションが増えてきているという実情は把握していました。そういった中で景観がどうなっていくのか、行政としてどんなアプローチがあるのかという課題感があつたというのがこのエリアを選んだ理由です。前回にも御意見を頂きましたが、例えばニュータウンや、過去に大規模なマンション、公団住宅がたくさんあつたところが、30年後や40年後にどうなってきたのかというのを私達も見てきたわけで、少し無配慮な言い方をすれば、今後そうならないための方法と言いますか、大規模なマンションが建つたときに30年後どうなるのかを見据えた景観形成というのは、何か手法がないだろうかという課題感から、この資料を作っております。</p>
門内部長	<p>資料に記載のある「若年・子育て世代のニーズに合った多様な住まい方を選択できる職住近接のまち」というのは誰がどこで掲げたテーマなのでしょう。京都市で掲げられたのでしょうか。</p>
事務局	<p>このテーマ自体は、令和5年度の都市計画見直しのときに、エリアのテーマ設定として書かれているものです。</p>
門内部長	<p>京都市の都市計画側で考えて設定したテーマということでしょうか。</p>
事務局	<p>そのとおりです。</p>
門内部長	<p>私は「京都駅東部エリア活性化将来構想検討委員会」の委員長を務めていたのですが、各区やエリアごとにテーマ設定がありますよね。それらが本当にそれでよいかどうかを、各エリアの視点から見ていくというのもやり方としてあるかもしれません。</p> <p>他にいかがでしょうか。</p>
山口委員	<p>私も清水委員のおっしゃったコンテキストが非常に重要だと思っております。私も歴史的景観アドバイザーとしてデザインレビューをしていたのですが、平面の間口などのスケール感、高さ方向の屋根や軒の連続性、横の連続性や壁面の連続性といったものを、例えば大規模なマンションやホテルを計画する場合にも合わせていくことが必要になってくると思います。それを単純にファサードだけでやるというよりも、先程の議論で言うと、そういったところに例えば空地を入れていくといった話もあり得るのかなと理解をしていました。そこで、少しお時間を頂いてメルボルンのデザインガイドのことを少し御紹介させていただいてもよろしいでしょうか。</p> <p>今画面共有させていただいているのはメルボルン中心市街地のデザインガイドというもので、サイトレイアウトのところを見ると、例えば壁面をこの大きなビルの中に入れていくような形で人の空間を作っていくというようなことを求められています。これは規制緩和になるのか、デザインガイドなので日本のガイドラインとは少し異なるかもしれませんが、こういう少し殺風景になっているところを人の空間にできるようなやり方を考えていこうとか、半屋外の空間がビルディングタイプとしてどんどん増えているので、おそらくそれを積極的に受け入れていこうというところなのだと思います。こういう半透明と言いますか、本当に壁面もなく中が見えるような建築が最近増えてきつつあります。これは特に熱帯の地域で多いと思うのですが、そのようなものも積極的に入れていこうということで作られているものだと思いますので、少し参考いただけるのではないかと思います。</p>
門内部長	<p>メルボルンのガイドラインは、アクティビティやまちづくりの話ではなく、ランドスケープや建物のデザインのガイドラインなのでしょうか。</p>

山口委員	そうですね、建物のサイトレイアウトのガイドラインというイメージです。
門内部会長	メルボルンはたしかヤン・ゲール氏も関わっていませんでしたか。
山口委員	<p>そうです。ヤン・ゲール氏が、このような形でオープンスペースをビルの開発のときに作っていくような方向にということで、ガイドラインを作っているという流れがあるようです。</p> <p>そういったものと、あとはやはり駐車場の問題がどうしても気になっています。特措法では、立地適正化の中で駐車場の配置適正化や、路外駐車場の配置基準などを定めることができるようになってはいるのですが、景観の観点から、駐車場をどこでも簡単に作れないようにできないようにできないだろうか、というようなことも個人的には問題意識として持っていて、そういったことも考えたいと思いました。</p>
門内部会長	<p>駐車場の話は、経済等の活力との関係でできそうですよね。ただこれについては、モビリティのシステム全体との関係も考えなければならないと思います。</p> <p>コンテキストの話について、清水委員いかがでしょうか。</p>
清水委員	<p>歴史的景観という意味では京都の中心市街地の辺りをどうしても対象にしがちですが、本日、桂川のエリアを取り上げていただきましたよね。桂川は工場跡地があったり、自衛隊駐屯地があったり、大規模な敷地に大きい施設がどんどん建ってくるという意味では、なかなかそれがコンテキストかというのは難しいかもしれませんが、その周りを見ると、結構色々なものがあります。例えば、「京都を彩る建物と庭園」などで、まとめて建物を選定あるいは認定したりしているのですが、そういうことはあまり知られていません。そういうところが周りにあってからの、あの巨大な敷地のデザインというのを考えるという発想がないので、京都であればそれをやれば良いのではないかと思います。</p> <p>実際の具体的なデザインは、山口委員が提示してくださったようなガイドラインのようなものがあると、より豊かになると思います。そこに何かこのコンテキストのスパイスが入った方が良いなと思います。どんな場所にも京都はコンテキストがあるので、それにこだわり抜いた方が良いのではないかと私は思っております。</p>
門内部会長	<p>ありがとうございます。</p> <p>平尾委員が途中から参加されたようですが、御意見等ございますでしょうか。</p>
平尾委員	<p>途中から参加したので、これまでの議論を確認させていただければと思うのですが、桂川の駅前で民間活力による再開発が進められる中でエリアコンテキストが大切だというお話や、フレーム設定をしっかりとしていこうということで、山口委員がおっしゃっていた駐車場が気になるというお話、あるいは、その辺りにアーティストがたくさん集まるようなまちづくりができないかといったお話が谷口委員からあったかと思えます。また、宮城委員からは、建築家がリードするのか、地元の人がリードするのかといったバランスで、行政がバックアップしなければいけないというお話があり、そのためには時間がかかるというお話も嘉名委員からあったと思うのですが、おおよそそういったところの議論に被せる意見を申し上げるイメージでよろしいでしょうか。</p>

門内部長	はい、どうぞ。
平尾委員	<p>やはりこの1、2年で、例えば桂川でも良いですし、アーティストインレジデンスであればサウス・ベクトルなどのエリアでも良いと思うのですが、もう一度コンテキストをきっちり整理するという作業をやりたいたまわず思いました。</p> <p>その次に、フレーム設定のときに、自由度をどう設定するかという話で、信頼できる建築家と地元の仕切れる人がいれば、その人に任せていけば、大きく考えるとスーパーバイザーがいるだけで成立すると思います。</p> <p>そういう建築家がないとか、信頼できる人がいない、マスターアーキテクトがない場合は、ある程度レギュレーションを決めていくなど、これはもうケースバイケースでやっていくしかないのではないかと思います。</p> <p>桂川でどうなるかという、そういう人を選んでいったときに、まずエリアコンテキストを、例えば、今回の検討委員会の中である程度考えて、あるいはコンサルタントにやってもらって、その後フレーム設定をしていき、それに対して私達が意見を言っている程度決めていくイメージではないかと思えます。実際にドライブしていくのには、おそらく5年くらいかかると思うので、それを政策実行委員会なのか部会なのか分かりませんが、そういったものできっちりフォローアップしつつやっていくようなことも方法としてあると思います。そういうイメージであれば、活力を強化するエリアを3つくらい決めて進めていくようなイメージではないかと思えます。</p> <p>どのエリアを選定するかについては、今思いつくのはやはり桂川駅前是非常に重要だと思います。サウスベクトルも大切ですし、竹田駅へ行く前くらいの地下鉄の駅の辺りでセッティングするのも一つあるかもしれないと思います。もちろん綺麗な景観にしたいのは明らかで、これについてはみんなが同意しているとして、先程犯罪に関するお話がありましたが、良い景観とするために犯罪を抑制するというのは絶対に重要なポイントだと思います。そういう意味では、3～4つのエリアを選定するのであれば、そういった課題のあるエリアも入れておきたいと思いました。サウスベクトルの辺りはこれからどんどん良くなるでしょうし、そういった課題感のあるところを1つ入れておくと、実験的ですが良いのではないかと思います。</p>
門内部長	平尾委員は都市の活力というのはどのように考えておられるのでしょうか。
平尾委員	<p>基本的に非常に重要なのは、若いジェネレーションが入ってくることで、30代で結婚して住み続けるのが一番理想的だと思っています。私は、そこに住む人が重要だと思います。やはりそこがベースだと思いますし、安い町家が残っているのであれば、そこにアーティストが入ってきてほしいとか、やはり住んでいる人がベースでそこを借りるような形で、例えば京都市立芸術大学で音楽をしている人がそこに住むなど、それは分散的であっても良いと思います。また、やはり活力の場所としては、街中もしくは向日桂川に注目しています。それから西大路駅前や山科でも良いかもしれませんが、サウスベクトルは絶対だと思っています。サウスベクトルでもっとも気になっているのは、竹田駅まで行くまでの間の辺りで活力の拠点を作りたいと思っています。これについては立地適正化計画でも課題になっており、例えば、向日桂川から東に行くとその辺りのエリアになります。その辺りのエリアで3つくらい活力の拠点となるような場所をつくり、大阪や京都の若い人を固定</p>

	<p>するのが、長期的に見ると非常に重要だと思っております。おそらく20年くらいのタームだと思いますが。京都の街中の方は放っておいてもやっていけると思うので、インバウンドもこのまま続くだろうといったことも考えると、やはりイメージ的には若い人が京都に定着することを第一義に考えます。</p>
門内部長	<p>これまでの様々な議論を聞いていると、やはり活力というものをどのように考えるかによって方針も分かれるように思います。ひとつとして宮城委員がおっしゃったようなベクトルの考え方もありますし、ある種の経済学的な観点から考えるというのもあります。また、長い目で見ると、歴史や京都らしさのような京都の一番の活力の大元というのは、東京とは少し違う形で長く続いてきていますよね。例えば、京都大学でなぜあれだけノーベル賞の受賞者が出るのかと言われるくらい、創造的な人材を輩出しています。ですから、東京や大阪の後追いをするような形とは違う方向でやっていく必要があると思います。活力と言ったときに、経済的に豊かであるということもありますが、いわゆる経済と言っても様々な考え方がありますよね。エコロジカルな話も入ってくるでしょうし、エコシステムの話も入ってくると思いますが、何を豊かとするのかがポイントだと思います。いわゆる現在のお金の換算でいくのか、将来にわたって価値のあるものを作っていくと考えるのかをよく考えて、京都の強みを大切にすることが大切であり、若い世代が入ってきたからといってうまくいくとは言えないような気がします。</p>
平尾委員	<p>段階論なのではないかと思います。</p>
門内部長	<p>本日御指摘いただいた議論を通じて、整理をしないといけない部分があることが分かってきました。日経ニューオフィス賞の審査で超高層ビル内のオフィスを見に行くことがよくあるのですが、何もないエントランスホールが作られている例を見かけます。京都ではそのようなオフィスとは違うクリエイティブなオフィスを作っていかなければならないと思います。</p>
平尾委員	<p>京都は絶対にそうあるべきだと思います。</p>
門内部長	<p>そういうことを大切にしながら、活力の捉え方を考えていく必要があると言えます。例えば、クリエイティブシティの問題でも、何をクリエイティブというのかをしっかりと整理をしなければなりません。</p>
宮城委員	<p>平尾委員のお話に繋いで少し話をさせていただきたいと思います。</p> <p>私はデザイン特区のようなものをつくると良いのではないかと考えております。例えば、京都は圧倒的に多くの方がデザインのクオリティを期待するはずなのですが、それが本当にちゃんと形になって見えてくるような仕組みがあるかということ、現在はやはり民間任せになっていると思います。もちろん大部分は民間任せで良いとは思いますが、例えば平尾委員がおっしゃったように、桂川周辺やサウスベクトルのエリアには、公的に関与できる可能性があるように感じます。都心からみて北山や東山、あるいは北西部、嵐山も含めてですが、そちらの方はうまくコントロールすれば、今の状態でデザインのクオリティは維持できるだろうと思います。一方で、西や西南、東と言うと山科、それから伏見にかけてのエリアというのは、積極的に仕掛けていくことができる可能性が高いところではないでしょうか。そこでもし開発なり建設行為が起こった時に、どのような形でサポートするのかというのは行政的に難しいところがあると思いますが、特区的な仕組みを作り、それがしっかりと形になれば、次の時代のものとして間違いなく良いものになってい</p>

	<p>くはずです。私自身ランドスケープデザインが本業ですから、コンテキストは非常に大切だと考えています。しかしそれだけでは京都全体はカバーできない。やはり南部や西部については、コンテキストレスとまでは言いませんが、先程お話のあったようないわゆる京都のコンテキストではないものも導入できる可能性があると思います。</p> <p>先程門内部長のお話の中で、京都市立芸術大学のキャンパスが話題になっていましたが、そのさらに東側の崇仁地区では現在かなり空き地が広がっていますよね。いわゆるソーシャルハウジングの部分も含めてこれから変わっていく可能性があるというところなのですが、都心部でもそこは一つ可能性があるエリアかもしれないなと思っています。</p> <p>ただ、非常に失礼な言い方なのですが、その実現のためには、京都市立芸術大学のキャンパスそのものをもう一度考え直す必要があると思います。先日、ハーバード大学の学生を連れて行ったのですが、キャンパスの外部空間を見た途端に「これが本当に art-school か」とがっかりしていました。おそらく相当厳しいコストの制約があったことは容易に想像できますが、それにしても悲しいくらいです。市立芸大は、ある意味で公共建築だと思うし、例えばあのようなところを中心にもう考えていけるような仕組みがあると良いと思うのですが、その核になる空間のクオリティがあれで良いのかということとは省みる必要があるでしょう。あの建築というよりも、京都では建築と屋外の間領域の空間をどう作るかが最も大事であるはずなのに、コンクリートの床がずっと広がっているだけの空間になっているということ自体が非常に残念でことも含めて、景観とデザインのクオリティを考えたときに、新しい試みを南部や西部の方で展開するような機会を、長い目で見て一つ打ち建てる必要があると思いました。</p>
門内部長	<p>京都市立芸術大学の場合は、キャンパスの敷地の形状にかなり無理があり、中心となる位置の敷地に建て替えるの住宅地を作っています。山本理顕さんもおっしゃっていましたが、あのエリアがオープンに使えるとまた全く違ったキャンパスをつくれたのではないかと思います。</p>
宮城委員	<p>それだけではなく、言うなれば外部空間がとても poor なので、あのままで本当に芸術大学として良いのかという印象を私は強く持っています。</p>
門内部長	<p>それゆえに京都市立芸術大学に集まるアーティストたちが頑張って作っていく必要もあるかと思います。</p>
平尾委員	<p>崇仁のエリアはこれからも少しずつ良くしていかなければならないのは明らかだと思います。</p> <p>話が戻りますが、もしやるのならエリアコンテキストなどで活力を導入する場所を決めましょうということで、これについては宮城委員も私も同じ意見で、京都の上の方はこのままでもなんとかなるだろうし、南の方や西の方で4つほど選んでいってはどうかだと思います。そのときに、先程宮城委員がおっしゃったお話からすると、ただずっと広がっているようなホールではいまいで、入れるなら京都的なアーバンティッシュの都市空間、エントランス空間を作りたいというのはみんなのイメージが共有しているのではないかと思います。それはコンテキストの中でやっていくべきではないかと思います。例えば仮に伏見でやるならば、酒蔵のイメージだからこうだとかいうようにやっていけば良いと思います。宮城委員のお話を聞きながら思ったのは、やはり町のレベルや街区のレベルというのがまずあって、伏見だったら</p>

	<p>伏見の街区があると思うのですが、久世の辺りだとどうなるのかと言うと、何もないのではないかと思います。ここをどう考えるのかというのは、コンテキストを語る人にぜひ教えていただきたいです。</p>
清水委員	<p>コンテキストはあります。歴史的には田畑のところも多かったのですが、例えば、染色業が京都市内からだんだん南に動いていき、あの辺りに集約するという歴史があります。染色業なのでみんなチェックしないのですが、何もないと言っている人はそういうところを見ないということですよ。どこにでも必ずコンテキストはありますし、ないと言っはけません。南の方はコンテキストがないというのは、少しよろしくないかなと思います。色々な人たちの知恵を集めれば、色々な見方ができると思います。</p>
平尾委員	<p>それならば南の方でも西の方でも、町のレベルでコンテキストがあるということですね。</p>
清水委員	<p>どこにでもあると私は思います。</p>
平尾委員	<p>それなら建築もありますね。つまり、街区レベルと建築レベルと環境レベルで考えたいのです。宮城委員がおっしゃったのは環境レベルだと思うのですが、街区や都市のレベルと建築のレベル、それから環境レベルで考えるときに、田畑があっても森があっても、それは環境であったりランドスケープになるので、やはりそこまでをまちづくりの中に取り込んでいくべきということで、グリーンシティになるのだと思います。今回のエリアコンテキストを考えて活力のためのエリアとして設定する場所は、都市的文脈のコンテキストや、建築的文脈のコンテキスト、いわゆる環境やランドスケープといったコンテキストがあり、そこには、田畑や森、植生、生態といったものも全て含まれているというパッケージで、この方向性でもし仮に3つか4つのエリアを設定するのであれば、それぞれの個性がある必要があり、同じではだめだと思います。</p> <p>先程のお話ですと、都市と建築だけでなく、ランドスケープの話も大切で、専門家が見ると、例えば「この辺りはカブトムシが多い」「この辺りはバッタが多い。なぜならこの辺りにはこんな畑があったからだ」といったようなこともあるかと思うので、そういうものを全てコンテキストとして最初のテキストを作る必要があるかと思っています。設計者にはそれを読んでから設計しなさいというような仕組みができれば良いと思いました。5年は長いかと思いますが、3年くらいかけて建築、街区、環境の3段階で情報を集約し、少なくとも「こうしてほしい」というテキストを作れば良いのではないかと思います。</p>
門内部長	<p>いくつか議論が出てきましたが、「美観形成地区」という名前と呼ばれている、相対的に見て歴史的な文脈が少ないエリアについて、デザイン特区などを指定して、新しいコンテキストを作っていくことを考えていくこともあるでしょうし、また、「旧市街地型美観地区」のように豊かな文脈が息づいているアーバンファブリックの中に少しずつインクリメンタルに秩序を作っていくこともあると思います。いずれにしても、まちづくりのアクティビティの担い手の問題を考える必要があります。開発者だけでまちづくりをやっていくのは良くないと思います。</p> <p>エリアの選び方は、施策の作り方にも影響を与えますし、活力の考え方にも繋がっていると思います。</p>

平尾委員	東山は特に顕著だと思います。都市計画マスタープラン部会等での議論では、東山において大阪の特区的問題のようなことが少しずつ出てきており、コミュニティが崩れているという話があります。そこだけの話ではないかもしれませんが、何か対策をしていかなければならないと思います。
門内部長	そこで気になるのは、経済的にお金が儲かりそうなところだけに特区の網がかけられて、集中的に開発されていくという点です。現在の開発の主体の多くは民間主体になっていっていますが、民間の力や住民の力、行政の力のバランスを考えていくべき時代が来ていると思います。その辺りのガバナンスの問題を考えていく必要があると思います。
平尾委員	投資してもらうのは良いことですが、コントロールする必要があると思います。先程の話で、下世話な言い方になりますが、東山などでは中国資本が土地や建物を買って貸すよりは、ホテルでやっていった方が良いということもあるのではないかと思います。都市計画マスタープラン部会でのこの間の議論では、そういったことでコミュニティが壊れていっているというお話がありました。そういう問題点のある場所があるわけで、崇仁も問題点のある場所でした。重点的にやっていくエリアについて、京都市にお考えいただくと良いのではないのでしょうか。やはり都市は自分のポリシーを持って住む人がいないと面白くないですし、そういう場所に色々な人が集まってくるのだと思います。
事務局	<p>これまでのお話を聞かせていただきながら、景観で活力を語るのは非常に難しいなと感じているのですが、先程の色々とお話を頂いた中で少し教えていただきたいことがございます。</p> <p>嘉名委員や宮城委員から、行政がそもそも事細かに町の在り様や活力の在り方をコントロールすべきではないのではないかといたお話がある中で、例えばそれを支援するという取組であれば行政としてあり得るのではないかと御発言があったかと思います。例えば、そういった活力ある景観づくりを目的とした地域のまちづくりに対する支援というもので、こんな行政の支援があれば有益ではないかというような手法がもしありましたら、お教えいただきたいと思っております。</p> <p>現在京都市では、市街地景観整備条例に基づく地域景観づくり協議会制度に関連して、モチベーションのある地域に対して、専門家の派遣を単発であったりあるいは半年や1年という単位で派遣するという制度がございまして、地域の方がまちづくりをしていこうというところに専門家を派遣して支援する仕組みがございまして、また、景観アドバイザーという方々がいらっしゃり、歴史的な施設等の周りに建造物を建てる場合に事業者に対してアドバイスをする制度もあり、先程清水委員からお話がありましたが、しっかりと学んだ上で建物を建てるようにというようなアドバイスをする制度となっております。そういった制度も運用しているのですが、現場では少し手応えがないなと思うようなこともございますので、先程御発言のあった支援という面で、例えばこんなやり方がある、あるいはこの方法を考えてみてはどうかといったことがあれば御示唆いただけないかと思っております。</p>
門内部長	それでは嘉名委員と宮城委員から、順番にお願いします。
嘉名委員	先程申し上げたことの繰り返しになるかもしれませんが、いわゆる協議会と言いますか、地元でちゃんとコントロールしたいという意向のあるところでは、そういう人達がやりたいことを技術的にサポートするような、例えば

	<p>専門家の派遣などが方法としてあると思いますし、また、おそらく地域でやろうとしていることは、景観のルールと言っても、建物等だけでないと思います。道路に出てくるような置物など、そういうものも扱うというのは、実は行政の方ではなかなか難しいところがあり、そういうことをルールでどう認定するのか、基本的には民民での町式目のようなやり方など色々な方法があると思いますが、やはり拘束力がなくなったときに行政がお墨付きを与えるような仕組みというのは方法としてあるのではないかと思います。</p> <p>また、先程山口委員がガイドラインについて御紹介してくださりましたが、「しなければならないわけではないが、やったら良くなりますよ」というカタログのようなものを提示するというやり方はあるかなと思います。話が逸れるかもしれませんが、先程のメルボルンのガイドラインの件でいうと、やはりメルボルンはイギリスの文化があるのでアーケードがある文化であったり、レールウェイという街の中に細い路地がいっぱいあるという地域性の中で大規模開発のようなものが起きたときに、そういうコンテキストをちゃんと生かしてくださいというところで、それを町の面として展開していくというようなところであるようなガイドラインがあるのだと思います。そういう場合は、今支援の制度や仕組みの例として申し上げたものは、活動や人がいる場合に、その人達がやりやすいようにしてあげる仕組み、制度のようなものとして一つあるかと思います。しかし、先程の議論ですと、今はそういうプレイヤーはいないけれども、現実にはこういうところはやはりエリア的に重要だとか、あるいはこういうところは非常に大きく変わっていきそうだ、変化が起きそうだというところに対して、重要なタイミングあるいは局面にあるので何か支援を入れていくという形のものはいずれあるかと思っています。</p> <p>そのときに人を育てるのか、プレイヤーを育てるのか、どういう枠組みでアクションを起こしていくのかというのはもう少し研究しないといけないかなと思います。</p>
門内部長	<p>大変参考になる御意見をありがとうございます。それでは宮城委員、いかがでしょうか。</p>
宮城委員	<p>なかなか難しいと思うのですが、様々な仕組みを作ってそれをどう運用するかというようなことも大切ですが、一方では、すぐれたモデルをつくるということも最も効果が高い方法だと私は思います。例えば、先程平尾委員が盛んにおっしゃっていた南部のエリアについて、コンテキストではない、確かにコンテキストはあるけれども、将来を見据えた時に、そのコンテキストがポジティブにプレゼンテーションできるようなものかどうかということも考えなければならないと思います。そうなったときに、そこで何か可能性があるような、開発という言葉はあまり使いたくありませんが、新たな動きが出たときに、例えばデザインのフェーズ、それからもちろんデザインの implementation も大切なので施工から竣工まで、あるいはその先も含めた非常に長いマネジメントやメンテナンスなども含めたかなり大きなビジョンを特区として仕立てた上で、そこにしっかりとパブリックな資源を投入することが大切だと思います。大部分は民間事業なのですが、そのプロセスをきっちりと評価できるような仕組みも同時に作っておき、デザインをモニタリングすることができる、おそらく一つの良いモデルができるでしょう。ただしその方法が必ずしも京都市内の全てのところに適用できるかどうかは分かりません。もちろんそれは規模にもよりますし、ステークホルダー</p>

	<p>の属性にもよってくると思います。しかし少なくともそういった部分に公的なサポートを入れることができれば、ずいぶん変わってくるのではないかと思います。これはあまり他所でやっていないことなので、京都でやってみる価値はあると強く感じます。例えば事業者の中には、デザインのフェーズにそんなに投資したくないと考えるところもあります。失礼な言い方かもしれませんが、特にコンテキストレスと言われる南部や西部で何かやろうとすると、何でもOKというようなことになってしまい、安かろう悪かろうになりがちです。そうではなく、少なくともどのような業態であるのか、あるいはどのようなものを作っていくのか、住宅であったりプラントであったり様々あるとは思いますが、従来とは少し異なるデザインが実現できる環境を整えてサポートすることができるモデルをつくと良いのではないかと思います。それは若手の建築家なりデザイナーなりを育てる上ではとても有効な手法になります。コンペティションのような形ではなく、しっかりとした主体がきっちりと選び、長い期間をかけてちゃんと面倒を見ていくというような仕組みが必要です。</p>
門内部長	<p>ありがとうございます。特に大切なのが「長い時間をかけて」というところだと思います。形を作って放り出すのではなく、やはりマネジメントが大切で、また、そこからさらに風上にあるコンセプトのところまでしっかりと考えていく必要があると思います。コンペをするときには、そういう大型のコンセプトが決まっていますが、うまくやればそこまで遡って考えることもできると思います。</p>
宮城委員	<p>京都にはそのようなところにしっかりと投資ができるような企業がまだ結構あるし、そのようなところで動きが起こったときに行政から少し働きかけるといったこともあっていいのではないかと思います。私は富山県の黒部市で長らく YKK のプロジェクトに携わっていますが、そこではデザインにとっても大きな価値を見出しているというところがあります。そのような観点では、京都には極めて大きなポテンシャルがあるのではないかと思います。</p>
門内部長	<p>そうですね。そういう意味では様々な企業がたくさんありますよね。色々な観点の御意見が出てきましたが、事務局の方から何かございますか。</p>
事務局	<p>非常に難しい議論だなと思っておりますが、委員の皆様から様々な御意見を頂きましたので、事務局としてはしっかりと受けとめて整理をしていきたいと考えております。活力とは何かということについては、やはりそこで生き生きと人々が活動することがもっとも大切だろうと事務局の方では考えており、そういう視点で今回は様々な事例を紹介させていただきました。</p> <p>また、京都市のピックアップしたエリアについては、ここで何かをするというわけではなく、ティピカルなところをいくつか抽出して、これをある意味でのたたき台として議論をしたいと思っております。エリアごとのコンテキストがもっとも大切だというのは皆様のおっしゃるとおりだと思いますので、それをベースにしつつ、ただ、コンテキストも歴史的なコンテキストもあれば、そうでもないものなど多々あるかと思いますので、しっかりと分類をしながら、その上でエリアごとに何をするのか、できるのかについて、手法は一つではないと思っておりますが、しっかりと事務局の方でこれから頭の整理をしていきたいと思っております。</p>

門内部長	<p>今回提示されたエリアは事務局の内部でも色々と議論されているということでしょうか。私は岡崎地域のエリアマネジメント組織である京都岡崎魅力づくり推進協議会のアドバイザーをしているのですが、そういう関係もあり、岡崎は文化的景観以上のポテンシャルのある場所だと思っています。</p> <p>活力に関する話だけでなく、全体のプロジェクトの話なども色々と出てきましたが、ガイドラインなどをうまく作っていくという方法や、他にも色々とやり方がありそうですね。</p> <p>経済学の観点から考えると、「新自由主義」が色々と力を持っているように思いますが、例えば、ハーバード大学のレベッカ・ヘンダーソンが『資本主義の再構築』という書籍を出版していたり、あるいはESG投資という概念が出てきたりしている中で、経済そのものの在り方をどのように考えれば良いのかということについても御意見を頂きたいと考えています。私が特に最近興味を持っているのは「エコシステム」という概念ですが、ビジネス系のエコシステムと自然生態系のエコシステムの両方を兼ねるような形で、最終的には経済の豊かさだけでなく、自然生態系や地球の在り方なども視野に入れて考えていく必要があると思います。その辺りについて、経済学の分野ではどのように整理されているのか、谷口委員に御意見を頂きたいと思うのですが、いかがでしょうか。</p>
谷口委員	<p>都市や景観に絡めて経済の文脈でエコについて考えるとすれば、やはりエネルギー関係の施策がもっとも重要になってくると私自身は考えています。建物の高断熱であったり、太陽光発電のエネルギーをいかに生かしていくかといった話が盛んにされており、公共交通機関で言えば、電車をもっと使うようにして、バスや自動車に関しても電気自動車や電気を使ったバス、再生可能なクリーンなオイルを使って動くようなバスを推奨するといった話になってきます。</p> <p>それが景観とダイレクトに結びつくかということと非常に難しいのですが、高断熱の環境に配慮した建物の景観整備となると、どうしても必要な予算が膨らみ、短期的にも中期的にも採算が取れるとは思いません。しかし、長期的に見て将来世代のことを思うと、短期、中期で見ると多少採算は取れないかもしれませんが、できるだけ良い素材を使って環境に配慮した景観、建築を整備していく必要があるのではないかと思います。短期で考えずに、中期、長期で先を見通すというのがポイントなのではないかと思いました。</p>
門内部長	<p>そうですね。サーキュラーエコノミーの話も出てくるでしょうし、特に今のお話で気になったのは、景観問題を考えるときに、経済とも非常に深く関わると思うのですが、物流や人の動き、モビリティの問題が関わってくると思います。モビリティとの関連で言えば、先程の駐車場の問題とも絡んできて、都市の景観を大きく変える要素になると思います。</p>
谷口委員	<p>景観にモビリティも関わってくると考えると、京都の観光データによれば絶対に京都駅を経由して観光客が入ってくるようになっているのですが、京都に入浴するときに何か別のルートがあると望ましいのではないかと思います。</p>
門内部長	<p>それについては議論がされていて、一極集中ではなく、観光客を少し分散させるという話が議論されています。</p>
谷口委員	<p>先生方が議論されているのは私もいくつか見たことがあるのですが、現実問題として難しいという結論になっており、バス停を分散させるなり交通の</p>

	<p>拠点を分散させたくても、京都は歴史的な名所が多く、それらをどけないと交通の拠点を分散させることができず、対策しようがないという話があります。それこそ、盆地を削るとか、景観を壊すようなことが起きてしまいますので、何か方法があれば良いと思いますが、なかなかどの分野の先生方も良いアイデアを出すことができないでいます。</p>
門内部会長	<p>先程宮城委員がおっしゃっていた YKK のように心ある企業もあると思いますが、行政とも連携しながら新しいモデルをつくっていくためには、企業のアライアンスのようなものも考える必要があるかもしれません。具体的なモデルがあると可視化され、みんなのイメージが湧きますよね。</p> <p>話は変わりますが、日経アーキテクチュアの最新号（2025年11月27日号）に京都市役所が大きく取り上げられていました。子供が市役所に遊びに来ているという話が載っていましたが、やはり魅力的な場所を作っていくということは大切なことだと思います。</p>
平尾委員	<p>優秀なデザイナーが入れば、そういうことを建築の中でできると思います。屋上は絶対に活用すべきだと思いますし、森があるのもっと良いと思います。</p>
門内部会長	<p>前回の自然や盆地景に関する議論の中で、都市の中にどれだけ生態系や自然を入れていくかという話も出ていましたよね。</p>
平尾委員	<p>大阪ガスさんがやっていらっしゃる NEXT 21 のような取組を、大阪ガスさんや関西電力さんのような企業に京都でもやっていただきたいですね。</p>
門内部会長	<p>他に御意見等はございますでしょうか。</p> <p>事務局の方で、今後検討を進めていく上でもう少しヒントが欲しいとか、現在考えていることに対して意見が欲しいといったことはありますか。</p>
事務局	<p>お話を伺っていて、コンテキストは重要なのですが、コンテキストが重要であるということをいかに共有していくかというのが、理解を得るところで重要になろうかと思っています。私達も学生のときに町を読み込んで設計しなさいと言われながら勉強をしていましたが、優秀な設計者は経済活動の中でも当然のようにコンテキストを読み込んで設計しますが、そうではないパターンが実情としてあるというのが、行政の悩みとしてございます。</p> <p>そこをカバーするのに、例えばデザインレビューなどの協議の中でやっていくとか、そのためのツールとしてプロフィールを公開し、その場所にはどんなコンテンツがあるのかを示すといった取組はしているのですが、なかなか浸透していかないと感じています。</p> <p>一方でそれを求めすぎると、先程宮城委員がおっしゃっていたように設計者の創造性と言いますか、より良いデザインを抑制しうるような側面もあって、そこをどういうバランスでやっていくのか、エリアを分けてやっていくのか、その辺りのバランス感と言いますか、展開の方法が非常にイメージしにくいので、その辺りについて御意見等頂けるとありがたいです。</p>
門内部会長	<p>コンテキストは必ずしも縛るものではなく、優れたデザイナーはコンテキストをバネにして新しいものを作っていくということがあると思います。それは結局のところ、コンテキストをどう読み込み、どう変換していくのかというデザイン能力とも関係しているので、人材育成の話も大切になるかもしれません。フランスなどでは、景観の専門家であるスーパーバイザーにある程度任せてしまうというやり方も導入されています。</p>

	<p>京都においては、先程事務局からも紹介のあった、景観アドバイザーが設計者にアドバイスをするという「優良デザイン促進制度」があり、私はそのアドバイザーを務めています。案件の数が非常に多いです。その経験から言えば、景観との関係を解説しデザインする能力のある人を育てていくことが大切なことだと思います。そのためには、景観アドバイザーの数や場の数も足りていないと感じます。</p>
事務局	<p>門内部会長には優良デザイン相談会を毎月やっていただいておりますが、案件が増えたときに今の体制でやっていけるのかという問題もあるでしょうし、色々な側面の問題があると感じています。</p>
平尾委員	<p>デザインレベルにもA級、B級、C級というように段階があると思うので、レベルに応じて対応をシステム化する必要があると思います。C級にはある程度のレギュレーションが必要ではないかと思います。</p>
門内部会長	<p>京都の景観政策では、「規制」「裁量」「特例」というように、ある程度景観コントロールの道具立てが揃ってきていますよね。</p> <p>そろそろ予定の時間が参りましたので、本日の審議としてはこれで終了にしたいと思いますが、色々と御意見等が出てきましたので、事務局でしっかりと整理していただき、うまく検討していただければ良い方針がいくつか出てくるのではないかと思います。よろしく願いいたします。</p> <p>それでは事務局に進行をお返しします。</p>
事務局	<p>ありがとうございます。それでは最後に次回のスケジュールの説明をさせていただきます。資料1の最後に今後のスケジュールを記載しておりますが、今後は今回のように部会を重ねていく予定です。今回は基本方針に掲げる基本的な考え方のうち、「4」の都市活力に関するものをピックアップして御議論いただきまして、次回からは基本的な考え方の「2」及び「3」をピックアップしながら、第2回の部会、第3回の部会を展開していきたいと考えております。おおよそ2箇月に一度程度のイメージでこの議論を進めていきまして、最終的にどんな方針でいくのかを本会に上げながら、議論を最終まで持っていくということをイメージしています。</p>
門内部会長	<p>事務局の説明の途中ですが、専門家を中心とした部会なので、議論を整理するというよりも、むしろ発散する方向を想定して、自由に御意見を出していただくような形でやっていきます。事務局ではそれを整理していただければと思います。そのため、本日も、挑発的なことも含めてあえて色々なことを御提案いただいたというふうに受け取っていただければと思います。よろしく願いします。</p>
事務局	<p>そうですね。部会でまとめていくというよりは、色々な御意見を頂ければと思います。</p> <p>議題については以上になりますが、会議の冒頭で少し触れさせていただいたとおり、ここで部会長の職務代理者を指名していただければと思います。職務代理者につきましては、委員会規則第4条第5項の規定により、あらかじめ部会長が指名することとなっておりますので、門内部会長から御指名を頂きたいと思いますがよろしいでしょうか。</p>
門内部会長	<p>それでは僭越ではございますが、平尾委員にお願いしたいと思っておりますがいかがでしょうか。</p>
平尾委員	<p>承知しました。</p>

門内部会長	ありがとうございます。それでは平尾委員を指名させていただきます。どうぞよろしくお願いたします。
事務局	以上をもちまして本日の部会を終了させていただきます。次回の部会は、先程説明させていただきましたが、1月頃に開催をさせていただきたいと思っております。 本日は遅い時間から長時間にわたりまして御審議いただき、誠にありがとうございました。